

イノベーションの逆機能

中川 蓮斗

指導教員 上村 浩

研究背景

喫煙に対する社会的規制が強化される中、喫煙率は増加傾向にある。その要因として電子たばこや加熱式たばこなどの新型たばこの普及が考えられる。新型たばこは「有害物質90%オフ」などの宣伝により健康被害を減らしたい喫煙者の心理に訴求し、周囲への煙害が少ないという認識から罪悪感を軽減させている。しかし健康被害や受動喫煙のリスクは依然として存在し、若者の喫煙開始のハードルを下げている可能性がある。

研究目的

本研究は「イノベーションの逆機能」に焦点を当て、新型タバコが社会的に意義のあるイノベーションであったのかを多角的に検討することを目的とする。イノベーションは本来、生活を豊かにするための現象であるが、社会に負の側面をもたらすイノベーションも存在する。新型たばこは本当に社会にとって必要なイノベーションであったのかを問う。

調査・分析方法

喫煙している20・30代男女を対象に紙媒体でアンケート調査を実施した。質問内容は喫煙状況、使用製品の種類、喫煙量などの基本情報、喫煙開始の影響要因、罪悪感の有無と理由、禁煙意識などを含む。選択式と自由記述を組み合わせた形式で、相関分析により喫煙量と罪悪感、罪悪感と禁煙意識などの変数間の関連性を検証した。調査は任意で匿名性を保証し、倫理的配慮を行った。

分析結果

紙巻たばこ利用者と新型たばこ利用者・併用者の間で、喫煙本数、罪悪感、禁煙意識に関する質問項目間の相関を検証した結果、いずれも統計的に有意な相関は認められなかった。「紙巻たばこより新型たばこを吸っている人の方が将来禁煙の必要性に対する知覚が小さい」という仮説は棄却された。製品の種類による喫煙行動や意識の明確な差異は確認できなかった。

考察・結論

新型たばこへの移行は製品選択の変化に過ぎず、喫煙行動の本質的变化を伴わない。移行の動機は他者への配慮による罪悪感の軽減や周囲への同調であり、健康意識の向上ではない。新型たばこは周囲への配慮という点で若干の効果はあるが、健康問題への本質的効果はなく、禁煙問題を先延ばしにしている。今後は製品の種類を問わず喫煙行動全体への対策、社会的規範の転換、他者への影響を意識させるアプローチが必要である。